



じゅうななさいの、
ゆれかた

やまうちりさ

じゅうななさいの、ゆれかた

作者：やまうちりさ

概要：すこしむかしのはなし。 その手のひらいっぱい、言葉をあつめていた「鈴木蘭乃」という、ちいさな少女の一瞬の寄せ集め。

スウィート・キャンディ

あまったるだけの
飴玉みたいに
ころがっているだけの
わたしたちだったから

いつのまにか舌のうえで
溶けてなくなってしまったの、

かもしれない

(2004/10/11)

こいのうた

窓のむこうがわに
青い空をならべて

窓のこちらがわに
鼻筋のととのった顔をおく

わたしだけのものではない
その世界がすき

(2004/11/02)

からん、ぐしゃり、

小気味良い音を立てて
転がった空き缶を
さらに小気味良い音でもって
ぐしゃりと踏み潰しました

その銀色のパッケージに
あなたを投影して

(2004/11/20)

うそつきのせかい

嘘と一緒に吐き捨てる二酸化炭素

緑が光合成をさぼっているから
このあたりは息苦しい

嘘吐きの二酸化炭素で
息苦しいんだ

(2004/12/23)

繭

つつみこんで、つつみこんで、
しまいには、わたしを かくしてしまって
わたしの、きたないところ、よわいところ、
もしかしたらすこしはあるかもしれない、
きれいなところ、や うつくしいぶぶん、まで
すべてつつみこんで、かくしてしまって

わたしがわたしじゃなくなることも
いとわないから

(2004/12/31)

1969年の過ち

アポロが行き着いた先には
うさぎなんていなかったけれど
それはひとから逃げていっただけ

わたしたち、そんなに
遠くまで行ってしまわない

(2005/01/13)

カノーセイと云う戯言

青い空の裏側を
見てみたいと思う

宇宙の本当の色を
知りたいと思う

ミルキーウェイのまんなかを
泳いでみたいと思う

あまり、用がない
惑星に生きている

(2005/01/18)

感じ取れるすべてを

たとえば、すべてが見えなくなったとしても
わたしは、全身の神経を尖らせて、張り詰めて
感じたい、感じたい、と 切におもうのです

あのひとの声や微笑みややさしさや
感じていなければいけないこと、すべて
張り詰めて、感じたい、感じたい、と

暗闇のなかの こうもりみたいに

(2005/01/18)

としをとる

わたしはどんどん、
やわらかなところを汚しているみたいだ

あたらしい世界を知るたびに、
なにかをうしなっていくよ、こんなふうに

(2005/01/28)

うみ

わたしは大海原
あなたもあのこもかれもかのじょも
みんな包んで、
そして、呑み込んでしまうの

吐き出してなんかあげない、
いつだって、おおきく揺れて

(2005/01/31)

着地点のはなし

みんな結局、
死ぬために生きているのだけれど

そんなことはさっぱり忘れたみたいに
笑っているから

だからきっと、明日もまわるの

(2005/02/05)

SS — 天国は高い

「死んだら天国にいけるんだ」

と、その少年は笑って言った。

「そうね、あなたは良い子だから、きっと天使が迎えに来てくれるわ」

あたしには、そう答えることしかできない。

「ねえねえ おねえちゃん、天国ってどんなところなの」

「おねえちゃんも、死んだことがないからわからないわ」

そう微笑み返せば、少年は死んだらわかるかな、と無邪気に笑った。

死んでしまったら、燃やされるか、もしくはそのまま埋められるかして、火の中で骨だけになるか、土の中で腐敗していくか、最後はそんなところだ。天国は、遥か遠く、天使は、いつかの君。天国に昇るには、あたしは身体も心も、きっと重すぎる。そんなことをぼうっと考えていると、少年が、どうしたの、とでも言いたげに、あたしの顔を覗きこんでいた。

ねえおねえちゃん、と笑顔で天国を語るその少年は、きっと、死からはほど遠い。あたしはもしかしたら、この少年の言うところの天国にはいけないかもしれない、とぼんやり思う。

(いけたとしても、あたしは高所恐怖症だから、きっと気が狂ってしまうだろう。天国は遥か遠く、高く、あまりにも穢れがなさすぎる。)

(2006/03/31)

さつりくがんぼう

ころしたい、
わたしのこころでくすぶる
いまわしい感情

(2005/02/13)

神さまのアイロニー

傷付けられたくない
汚れたくない
隠れていたい
それでも、だれかと繋がってほしい

(あなただって、そうでしょ?)

ふれてくれるひとがいなかったら
この身体も この声も この想いも
このやさしさも このするどさにだって
なんの意味もないから

(だれか、どうか、そっと)

たまごを扱うように
ふれて、
細くて脆い糸で
つながって、

(2005/03/18)

EAT

添加物にまみれて
得体の知れない物体X、
呑みこんで、吐き出さないように

もういっそ、なんでも食べられる気になる、
あいつもあのこも、あれもこれも、ぜんぶ、

(2005/06/25)

侵食

目をつむれば、脳内に
消えて欲しいとおもふ生き物が
うちやうちや巣喰つてゐるのが見えるのだ。

あたしの内部でうごめく悪どい感情、
増殖し過ぎて呑み込まれて仕舞ふ。

あたしは骨にも成れないのだらうか。

(2005/09/06)

飛び立つ準備はできているか

流した涙の分、軽くなった身体で
今なら、空だって飛べるでしょう？

可能性の幅を見定めたりしない
あたしは、なんだって出来る

(2005/10/18)

君色アイデンティティ

あなたが此処から居なくなっても
世界はなんの支障もなく回り続けるけれど
あなたが此処から居なくなるとは
あたしのちっぽけな世界が上手く回らない

存在価値が欲しいのなら、
あたしが幾らだってこしらえますから
自分は世界にとって取るに足らない存在だなんて
悲しみに暮れて嘆いたりしないで

存在理由が欲しいのなら、
あたしの存在を其れにすることはできませんか
生きている意味が分からないだなんて
果てないものを深追いしたりしないで

あたしの世界を滑らかに回して
あなただけのリズムで、滑らかに回して

(2005/10/26)

あたしはいつかそれに殺されるだろう

ひたすら泳ぐだけなら
喻えそれが酸欠状態であろうと
容易くこなしてゆける

モノクロームの映像、モノラルの音声、
感情のない瞳、想いのない言葉の羅列

泳いでゆく術なら、飽きるほど身につけてきた

それはひどく、容易いのだ

(押し殺した自分に殺されるのはいつだろうか)

(2005/11/28)

狂氣的に偏った、

どろどろに甘やかして、ぐちゃぐちゃに壊したい／崩れる君を目の端で確認したら、口許に浮かぶのは汚れた微笑み／手を差し延べる振りをして、引き寄せたら離してあげない／必要としてくれた分だけ、しっかりと愛してあげるよ

所詮、ただのエゴイズムで成り立つ想い
君がもたれる背中が、僕のものだけなら好いの

(2005/12/07)

いつかの風景

散った花弁は貴方の血痕

立ちつくしたまま、
白い靴が汚れるのも厭わずに

亡骸が何処にも見付からないよ

(2006/01/15)

(さみしい)

此処に居ることと居ないこと、
居ることを認められることと、
「あたし」と云う人間の存在

深みに嵌って泣き出しそうになる
震える心をおさえる身体

もしかしたら
誰かに

抱き締めてほしいだけなのかも知れない

(2006/02/01)

歪曲コミュニケーション

何の為に付いている口なのか
伝えたい言葉が喉元に引っ掛かって
呑み込んだら消えて仕舞いそうだ

君の其の耳に
僕の此の聲で響かせなければ
屹度、何の意味も無いと云うのに

か細く頼り無い質の此の聲で
君の鼓膜を揺らすから

言葉の奥迄真っ直ぐ見抜いて、
僕を掬って、

「君に伝えたい」

(2006/02/01)

どろり、

まるで餌を与えられているみたいだ、と
君がちいさく笑った

手のひらの上には板チョコのひとかけら、
体温で溶け出す前に口内へと運ぶ

ああいっそ、なにもかもどろどろに溶けて、
僕だけの君になってしまえばいい

呪いをかけるように
赤い舌を見詰めて居る

(2006/03/16)

SS — Drawing

「この世には、居なくなつてはならない人間なんてひとりも居ないんだよ。誰かひとりが死んだところで、世界が回り続けることには何の支障もないのさ。お前もあいつもわたしも、大臣だろうが大統領だろうがね」

ひどく残酷なことを言う男だ、と、そう思った。夢も希望もあったものじゃない、と。

確かに、この男の言うことに否定の余地はない。例えわたしが、今ここで死んでしまっても、世界は明日も回り続ける。誰かが泣いたって、それは世界から見れば取るに足らない小さなことだ。確かに、男の言うことは正論だ。否定する気も起こらないほどに正論だ。何者であるかを名乗らないその男を、わたしはきっとこれが神であろうと思った。神はわたしの中で、どこまでも残酷で、冷徹で、意地が悪く、何者も救わない者として存在していたから。

「わたしが今すぐ消えても良いと思っているの」

私の問いに、男は愚問だというように嗤いながら言った。

「そんなことは言っていないだろう。居なくなつても良い人間なんて、ひとりも居ないんだ」

「さっきと言っていることが違うじゃないか」

わたしの反論は一笑に付される。

「居なくなつてはならない人間も、居なくなつても良い人間も、どちらも存在しないのだよ。分からないのかい？」

小馬鹿にするかのように口角を上げる男の前で、わたしは居た堪れなくなった。その笑みは、嘲りか、もしくは哀れみを含んだそれに思えた。

じゃあどうしろっていうんだ、そう不貞腐れるわたしの掌に、男が何かを握らせる。

「そんな世界で、何を求めて、どれを選んで、どう生きるか、だ。お前しか描けないものを描く覚悟は、決まったか？」

そう言って微笑んだその男の表情からは、嘲りも哀れみも感じられない。わたしは困惑して、視線を掌に移した。決して大きくはないわたしの掌に握らされた、新品の、白いクレヨンを見つめる。

「白いクレヨンじゃ、何も描けない」

そう言うわたしは、すでに、男の回答が解っていたのかもしれない。

「もう解っているんだろう？何を求めて、どれを選んで、どう生きるか。それはすべて、お前がお前自身で決めることだ。色だって、お前が決めるんだよ」

ああ、やっぱり、と、わたしは思った。神は何者も救わない。だけど、それが正解なのだ、きっと。

「さあ、お前にしか描けないものを描く覚悟は、決まったか？」

男はまた、先ほどと同じ問いをわたしに向けた。わたしは、答える代わりにその白いクレヨン握りしめて――

ひどく残酷なことを言う男だった。だけどそれはすべて、最初から最後まで、どこから見ても、正論だった。わたしはその男こそが神だと思った。何者も救わず、すべてを生かし、すべてを殺す神。白色のクレヨンをかざして、男がそこに居たことを確かめようとしたけれど、もうそこには、人の気配すら残っていなかった。

握りすぎたクレヨンが、掌の中で、小さく、ぼきん、と鳴った。

フェイドアウトシンドローム

きみの白いやわはだに
ひやり、刃の感触

まるで無機質なそれから
鼓動をまったく感じない

手を動かせば血がにじんで
きみはちいさく嗚咽を漏らす

白い肌に映える赤いコントラスト
ぼくにはすこし眩しすぎて
くらり、めまいを覚えるようだ

幾つかの筋がきみの肌に線を描いて
ぼくがそれをひとつひとつ
なぞる、なめる

ねえ、泣かないでよ、鳴かないで
きみの望んだ未来じゃないか

(狂気と快楽と絶望の狭間、
ぼくたちにはなにも見えない、
ぼくたちはなにも掴めない)

(2006/03/25)

その温度をもってすべての活動は停止します

マイナス273℃、絶対零度で
きみとあたしを形づくる原子すべての活動を止めて

「さよなら」

(2006/04/25)

可能性を秘めた両の腕

あたしの両手は空っぽで、
なにも、なにも、なにもない

だからあなたの手を握れるの

(2006/04/29)

カーニバル

ゆるく抱きしめてみたい
ひどく殴ってほしい

ふかくキスしてみたい
つよく噛みついてほしい

さっと消え去ってみたい
そっと、救いあげてほしい

(2006/05/14)

世界はいつも涙で濡れる

誰かの痛みや哀しみのうえに
成り立つあたしのしあわせを知る

どうかまっとうして
全力で生きて
すべてを無駄にしないために

強く笑うきみを見られますように

(2006/06/12)

あおいはるの日々

あたしと、
あたしがあいしているひとみんなが
しあわせに暮らせる世の中だといひ

そんなお気楽なエゴイズム

(どうか笑わないであたしたちの毎日)

(2006/06/12)

「わたくし」

あふれてはおりますが、
ありふれてはおりません

(だから大切にしてください、ませ。)

(2006/07/04)

母なる、

ふるふる、涙の気配
ぷつぷつ、朱色の気配

あたしを形成する液体ぜんぶ
溶け出して、流れゆけ

あたしは今夜、
海にかえる

(2006/07/13)

やさしく摘んで、今すぐ飾って

枯れてしまう前に
摘みあげて
飾ってやってください

あなたのお部屋の華奢な花瓶に

(2006/08/27)

多重人格浄化作用

きみを想ううつくしくてかわいらしいあたしが
やつを恨むみにくくてきたらしいおれを
どれほど浄化してくれると

謂うの

(2006/11/30)

にがいなみだ

僕らはほんとうに弱いから

強くなりたいなんて願って
届かない理想を描いて
狭い世界を嘆いて
美しい君にこがれて
小さな自分を憎んで

泣くことも、笑うことも、怒ることも、
難しくて

誰かを罵りたくて
でも本当に罵りたいのは自分で

仕方がないと、呑み下す

(にがくてくるしくて涙が出た)

(2007/05/28)

おわりに。

広い広いインターネットの世界の、ほんの片すみで、
ぼつりぼつりと言葉を吐いていました。

今回まとめたものは、2004年から、2007年までの言葉たち。

年齢で言うと、15歳から、18歳まで、

ちょうど、中学3年生から、高校3年生までです。

「17歳」という響きには、「ハタチ」と同じくらいのパワーを感じるので、
今回は「じゅうななさいの、ゆれかた」というタイトルにしてみました。

幼くて拙いものばかりですが、

その時その時の感情が息づいている、かわいくてたいせつな言葉たちです。

なにか響くものが、少しでもあったらうれしいです。

21歳になった今、こうしてまとめるという作業ができて、良かった。

このころの「あたし」に教えられることも、たくさんありました。

また、ここから、ちょっとずつ言葉を吐いてはまとめていきたいと思います。

読んでくださって、ありがとう。

2010.06.23
やまうちりさ